Ⅰ

子ども･若者が主体的に参画する活動と大人の関わりについて

この章では、以下の点について述べています。

○子ども・若者が主体的に参画する活動の中で、大人は子ども・若者とどのように関わればよいのか
○子ども・若者が主体的に参画することで、子ども・若者は体験的にどんなことを学ぶことができるのか
○子ども・若者が主体的に参画することで、子どもの成長にどのように影響するのか
○子ども・若者が社会的に自立するために、大人はどのような支援ができるのか

子ども･若者が主体的に参画する活動と大人の関わりについて

神奈川大学講師　久 田 邦 明

●子ども･若者の参画への視点

子ども･若者が中心的な役割を担う地域活動は、 30 年ほど前まで広く普通に行われていました。このことをまず確認しておきたいと思います。

その一例として、県西部で行われているどんど焼き（道祖神の行事）などの伝統行事があげられます。松田町のある地区では、毎年 1 月 14 日、「がき大将」と呼ばれる中学 2 年生のﾘｰダーが中心となって、どんど焼きが行われています。子ども会の育成者や自治会の世話役の大人が取り仕切っているところが多いのですが、ほんの少し時代をさかのぼると、この事例にみられるように、子ども･若者が中心となる伝統行事や伝統芸能が、どの地域でも行われていました。そして、その体験を通して、子ども･若者は大人へと成長していったのです。その意味で、地域の暮らしに埋め込まれた、子ども･若者を育てるための知恵といえるものでしょう。

それが急速に失われたのは、この 2,30 年のことです。その後、子ども･若者を育てる役割は、もっぱら学校教育に任されるようになりました。それでうまくいくと、多くの人が思ったのでしょうが、最近では、学校を支える地域の教育力が衰弱すると共に学校教育にも限界のあることが明らかとなり、あらためて学校と地域の協力の必要がいわれるようになっています。

このような経緯を承知しておく必要があります。ただ、そうはいっても、昔のことを懐かしがって伝統文化の復活を唱えても仕方がありません。家業と地域の生産活動が失われたなかでは、お題目に終わるだけでしょう。また、前近代社会では生活共同体の決まりごとが、子ども･若者の行動を厳しく規制していた事実を忘れるわけにはいきません。いずれにしても身勝手な復古主義は、過去の歴史を恣意的に切り取ることになるでしょう。

そうであるとすれば、地域の暮らしの知恵に学びつつも、そこに止まることなく、子ども･若者が育つための支援の方法を工夫していかなければなりません。地域の暮らしに埋め込まれた知恵に学びつつ、新しい方法を工夫するという課題は、子ども･若者の分野だけのものではないでしょう。地域の暮らしの仕組みが失われたにもかかわらず、いまだに新しい仕組みが整っていない、時代のはざまに生きる者にとって、暮らしの全体に関わる切実な課題です。このように考えると、この活動事例集に取り上げられた事例は、子ども･若者を支援する活動であると共に、それだけでなく、地域の暮らしを創造しようとする活動でもあるといえるでしょう。

●子ども･若者と大人の関係を見直す

それにしても、子ども･若者のなかでは大人が頭を抱え込むような問題が拡がっています。社会的な関心を持たないまま身近な世界に閉じこもり、まるで自家中毒のような症状に陥っている子ども･若者も少なくありません。彼らのあいだでは、ごく身近な人間関係さえ忌避する姿も目立ちます。そればかりか、いざ社会へ出る年頃になっても、「やりたいことが分からない」といって戸惑う若者たちも珍しくなくなっています。

これには多くの原因があるのでしょうが、まずもって見ておかなければならないのは、子ども･若者への大人の対応をめぐる問題でしょう。というのも、高度経済成長期以降、大人は、子ども･若者の日常生活から様々な体験の機会を奪ってきました。あらためて考えてみると、これは実に驚くべき変化です。もし大人が、このことの重大さに気づいていないとすれば、それこそが深刻な問題です。

例えば、こういうことがあります。いつの頃からか、大人は、子どもは聞き分けが良いのが当たり前、若者は行儀が良いのが当たり前と考えるようになりました。子ども･若者は、その完成した姿を基準として評価されるよ

うになり、そのせいで、ほんの少しの逸脱的なふるまいも、いちいちチェックされ、厳しくマイナスの評価が下されるようになっています。失敗を重ねながら学んでいくという、子ども･若者に必要な機会さえ与えられていないのです。いつもいつも引き算の評価をされていては、評価される側としては、たまったものではないでしょう。

今必要とされるのは、地域の暮らしに子ども･若者が中心となって活動する機会を用意することです。そういうところで彼らが失敗することもあるでしょう。しかし、その体験を通して、彼らは多くのことを学んでいくにちがいありません。大人に求められるているのは、そのための条件をつくり、子ども･若者の活動を支援する役割です。

ところで、これまでにも、子ども会をはじめとする様々な青少年団体が、子ども･若者に活動の場を提供してきました。また、青少年育成関係委員などの地域の人々も、子ども･若者の活動を支援してきました。これらの活動は、地域に無関心な住民が増えるなかで、なくてはならない活動です。しかしその一方で、多くのところで団体活動や育成活動の難しさが言われています。このことに注目しないわけにはいきません。

おそらく問題はこういうことなのでしょう。団体育成が中心の従来の活動プログラムは、生活共同体の暮らしの記憶が、子ども･若者のあいだに残っていた時期に考案されたものです。その時期には隣近所の付き合いも今日ほどよそよそしいものではなかったし、子どもの数も多く、兄弟姉妹もいました。異年齢集団は失われていたかもしれませんが、同年齢の遊び仲間はありました。そういうところで様々な体験を積むことができました。生活共同体は失われていても、その記憶が残っていたということです。

そんなわけで、青少年育成の活動も、彼らが自分たちの世界で身につけてきた体験に依拠することができました。ところが、もはやそのような条件を想定することはできなくなっています。友だちとざっくばらんに話しをするとか、夢中になって一緒に遊ぶとかいうことを体験したことがないのが、今日の子ども･若者の姿なのです。そのせいで、青少年育成の活動プログラムも空転してしまうことが多いのではないでしょうか。このような状況の変化を確認して、青少年育成の活動プログラムを大胆に変えていく必要があります。

●わたしたちの未来を失わないために

居場所づくりの必要が盛んに言われるようになったのも、このような問題意識のせいでしょう。居場所づくりをなぜわざわざ大人がやらなければならないのかと疑問を持つ人もいるかもしれませんが、地域の暮らしに子ども･若者の世界が失われたせいで、大人がそれを意識的につくらなければならなくなっているのです。

子ども･若者の現状に対応する新しいタイプの活動プログラムには、およそ居場所づくりの方法が組み込まれていると見ることができます。それを一言でいえば、大人が余計なお節介を焼かないというものです。子ども･若者の支援をすすめるには、居場所づくりにおける大人のこのような関わり方が参考になります。熱心な善意の大人にかぎって、あれやこれやお節介を焼くことが多いようです。そういう関わり方は空転するおそれが大きいでしょう。子ども･若者が様々な課題に立ち向かうことを期待するとすれば、大人はお節介を焼くのではなく、居場所づくりの場合と同じように、何よりもまず、ゆったりと構えて待つことを自分の役割と承知しておくべきです。

また、体験学習の必要が言われるのも、同じような問題意識にもとづくものでしょう。学校教育が陥りがちな抽象的な知識の学習の限界をみて、人々が暮らす地域へ出て、頭だけでなく、こころやからだも使って学ぶという、この学習方法に期待がかけられるようになっているのです。

ただしその場合にも注意が必要です。大人がお膳立てをした活動プログラムを、子ども･若者がまるで演技者のようにやってみせるといった受け身のやり方では意味がありません。事前の計画の段階から活動を終えたあとの評価の段階に至るまでの全体を、子ども･若者が主体的に担うという、それこそ参画と呼ぶにふさわしい活動でなければなりません。そういう意味を持った活動であれば、仮にそれが大人の常識を超えるような

型破りのものであったとしても、学習としての意味を持ちます。

子ども･若者が参画する活動は、彼らのなかの年長者にとって、とりわけ大きな意味を持ちます。このことを特に強調しておきたいと思います。彼らがリーダーシップを発揮することによって、大人になる準備をすることになるからです。小･中･高校と学校別に分けられる学校教育の場合、この仕組みをとるには特別な手続きが必要となりますが、地域のなかでは容易にやってのけることができます。

それにしても、このような活動は、大人にとって手間のかかることです。昔のように、子ども･若者の面倒をみる仕組みが地域の暮らしのなかに組み込まれていた時代には、大人は当たり前のようにそれを引き受けてきました。ところが、その仕組みが失われてしまった現在では、大人は意識的に関わる必要があります。そこでは当然にも、いろいろと苦労が多くなります。しかし、これをやらないと、子ども･若者は大人になることができません。わたしたちは未来を失うことになるでしょう。

●大人にできることは

それでは、大人は、具体的にどうしたらよいのでしょうか。

子ども･若者が主体的に関わることによって自分の力を試すことのできる機会をつくるためには、大人の考え方や関わり方を、その基本のところから問い直す必要があります。

まず第一に、参画をお守りことばのように使うことには、特に慎重にならなければなりません。「操り参画」とか「お飾り参画」とかいう言葉もあるように、参画がお題目に終わるおそれが大きいからです。

子ども･若者の自主性を尊重すると言いながら、陰に陽に口を挟んで彼らを操るようなことをやっていないでしょうか。また、意見を聞きたいといって彼らを集めておきながら、彼らの意見に答えることもなく、聞きっぱなしにしていないでしょうか。大人の自己満足に終わるだけのこのような活動を続けていれば、そのうち彼らに愛想を尽かされるようになるでしょう。

第二に、子ども･若者が力を発揮することのできる分野について、あらかじめ率直に提示しておく必要があります。大人は自分の主観的な願望と現実的な条件を混同してはいけません。たとえ善意からであっても「何でもできる」などと言って、彼らに空しい期待を抱かせるべきではありません。「ここからここまでは大人が引き受ける」という枠組みを明示した上で、子ども･若者の活動の可能性について伝えるのです。このような率直さは、特別のことではなく、人間関係一般に共通する最低の礼儀ではないでしょうか。

「何でも思ったようにやりなさい」と言いながら、いざとなると「これはだめ、あれはだめ」と文句を言うようなやり方を続けていては、大人への不信感を増幅させるだけです。これを避けるには、大人は自分の力を承知しておかなければなりません。自分の人間の幅がどれくらいかをよく知っておくのです。力不足を恥じる必要はないと思います。恥じるべきは、大人が自分の力の限界を知らないことです。力の限界を知っていれば、徐々にそれを広げることもできます。また、活動が壁に突き当たったときには、子ども･若者と一緒に知恵を出し合い、その壁を乗り超える工夫を続ければよいのです。

第三に、これからどのような暮らしを望むのか、この「まち」をどうするのかについて考える必要があります。住み良い地域社会をつくることこそが、地域の大人の課題なのです。

まちづくりという大人の課題を忘れて、一方的に子ども･若者に働きかけるだけでは、どれほど立派なことを言ってみても、ただのお説教に終わるでしょう。お説教にかまける大人の姿を見る子ども･若者は、未来に希望を持つことができません。

まちづくりについて、大人は、子ども･若者との関係のなかで多くのことを教えてもらうことになるにちがいありません。今、時代は大きな転換期を迎えています。能率主義や生産第一主義を前提とする固定観念に囚わ

れる大人が、子ども･若者との付き合いの過程で気づかされることは多いでしょう。その結果として、大人と子どもの関係が変わって、ことあらためて子ども･若者の参画ということばを使う必要のない地域の暮らしが実現することが期待されます。特別の活動プログラムを実施するまでもなく、日常生活のなかで子ども･若者が身近な大人と力を合わせて協働の関係を生み出すことこそが求められているのです。

最後にもう一つ、言わずもがなのことを付け加えておきたいと思います。本気で子ども･若者の活動に関わってきた人には先刻ご承知のことでしょうが、彼らと関わる大人には、大なり小なり“腹をくくる”という覚悟が求められるということです。　子ども･若者との関係は、機械操作や接客方法のマニュアル（手引き書）に収まるようなものではありません。マニュアルが不要だという意味ではありません。ここで言いたいのは、そういうことではなく、子ども･若者との関係には、それらしい一般論で説明することの難しいレベルの問題があるということです。そのために、ギリギリのところでは、腹をくくると形容するしかない覚悟が、大人に求められます。

これは誰にでもできることではないでしょうが、世の中はうまくしたもので、このような課題をすすんで引き受ける大人が、どの地域にも必ずいます。そういう人物の存在を貴重な財産として、間違っても敬遠したりすることなく、“できる人が、できることをやる”という方法を工夫して、多様な立場や関心の人々が互いに協力しながら、子ども･若者の参画を追求していく必要があります。

◇参考資料

･沼田芳宏「道祖神の祭りから子どもを取り巻く地域を考える」『青少年』2004 年 10 月号。

･ロジャー･ハート、木下勇／田中治彦／南博文監修、ＩＰＡ日本支部訳『子どもの参画　コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000 年。

･『子ども･若者が主体的に関わる活動事例 32』社団法人青少年育成国民会議、2001 年。

･『社会つながりガイド　for K-teens』神奈川県青少年総合研修センター、2003 年。

久田　邦明　氏　プロフィール

神奈川大学、東京学芸大学などで社会教育関連科目を担当。雑誌『青少年』（社団法人青少年育成国民会議）編集委員。専門は、青少年教育、地域文化論。神奈川県青少年問題協議会では「『働く』という視点から考える青少年の自立について」というテーマで検討を続けている。